

第56回試験研究成果発表会（作物）発表概要

【日時】平成31年1月31日（木）13:00～16:15

【会場】農林総合研究センター農本館（千葉市緑区大膳野町808）

発表1 成果発表（13:10～13:35）

小麦「さとのそら」の晩播栽培で、収量及び品質の低下を防ぐには

水田利用研究室 宇賀神七夕子

千葉県における小麦「さとのそら」の播種適期は11月上旬頃ですが、やむをえず12月上中旬に晩播栽培する場合における最適播種量及び窒素施肥方法をご紹介します。晩播栽培で適期播栽培と同等の収量及び品質を得るには、播種量を増量し、追肥を茎立期10日前から茎立期に行います。さらに、子実の粗たんぱく質含有率を向上させるためには出穂期の追肥が有効です。



小麦「さとのそら」

発表2 成果発表（13:35～14:00）

落花生の種子生産は気象変動に合わせた技術で

落花生研究室 小林孝太郎

近年の気象条件の変化が、落花生の種子生産に様々な影響を与えています。夏期の高温乾燥による種子の幼芽褐変症の発生や、秋期の長雨で地干し・野積み乾燥が適切に行えず、種子の品質が低下する等の問題が起きています。そこで種子生産に適した播種時期、夏期高温乾燥時のかん水技術や、トンネル被覆による乾燥方法をご紹介します。



トンネル乾燥（左）と
野積み乾燥（右）

発表3 成果発表（14:00～14:25）

ラッカセイ茎腐病を効果的に防除するための対策

最重点プロジェクト研究室 大井田 寛

近年落花生で多発し問題となっているラッカセイ茎腐病を効果的に防除するための方法を明らかにしました。本病の主な感染時期である6月中～下旬と8月上～中旬を狙って有効薬剤を散布することに加え、落花生栽培前の緑肥の栽培とすき込み、発病株の速やかな除去を組み合わせる取り組みが重要です。それぞれの技術について、効果とポイントをご紹介します。



ラッカセイ茎腐病の病徴

発表4 成果発表（14:40～15:05）

水稲種子生産における全面全層施用による全量基肥栽培法

— 一発肥料で種子生産を省力化 —

成東育成地 藤代 淳

水稲種子生産においても、作付規模拡大、水田の大区画整備が進む中、追肥作業の労力軽減が求められています。全量基肥栽培法を種子生産で行う場合、種子生産向けの「基肥+穂肥」分施肥体系と同量の窒素量で、一般栽培用の全量基肥用肥料を全面全層施用することで、「ふさおとめ」と「コシヒカリ」では、分施肥体系と同等の種子収量を確保でき、基準収量を上回ります。一方、「ふさこがね」では、基準収量を下回る年がありました。



主要3品種の種子粒

上：「ふさこがね」

左：「ふさおとめ」、右：「コシヒカリ」

発表5 成果発表 (15:05~15:30)

水稻栽培に牛ふん堆肥のリン酸・加里成分を有効利用

—堆肥と窒素側条施肥による「コシヒカリ」省力栽培—

土壤環境研究室 太田黒 駿

牛ふん堆肥を10a当たり300kg施用し、硫安と被覆肥料を混合した窒素肥料のみを移植時に側条施肥して「コシヒカリ」を栽培することで、窒素・リン酸・加里の3成分を化成肥料で側条施肥する体系と同等の収量が得られました。窒素肥沃度の大幅な向上もなく、リン酸・加里肥料の全量を堆肥中に含まれる成分で代替できる、牛ふん堆肥を有効利用した全量基肥水稻栽培をご紹介します。



側条施肥同時田植え

発表6 情報提供 (15:30~15:50)

水稻高密度播種苗移植栽培に対する田植え機の対応状況とその苗及び本田における生育の特徴

水稻温暖化対策研究室 太田 和也

水稻高密度播種苗を用いた移植栽培の導入が本県においても進んでいます。当技術は一箱当たりの播種量を増加させて単位面積当たりの移植苗箱数を削減することで省力・低コスト化を図るとするものです。しかし、移植精度への影響、早期栽培における育苗・本田の生育の特徴については不明な点が多くあります。そのため、今までに得られた試験結果を整理し情報提供します。



慣行苗 (左) と
高密度播種苗 (右)

発表7 情報提供 (15:50~16:10)

平成30年度の気象条件が水稲の作柄に及ぼした影響

水稲温暖化対策研究室 望月 篤

平成30年度の気象条件が水稲の作柄に及ぼした影響について解析した結果を報告します。また、この他に、水稲の高温登熟障害について、出穂後20日間の気温が高いと発生し、白未熟粒が増加すること、発生には品種間差があること、追肥を適切に施用し、登熟期間中の葉色を維持することによって障害の発生が軽減できることなど、現時点で明らかになっていることを情報提供します。



高温登熟障害の品種間差